

群書類要

卷之二

十一

1曾4
775
223

160 150 140 130 120 110 100 90 80 70 60 50 40 30 20 10 1 150 140 130 120 110 100 90 80 70 60 50 40 30 20 10 1



僧4
門1
775
223

祥書類從卷第ニ方ニ十七



迴國雜記

道真准后

後土門

文明十八年六月上旬乃渡北征東行のちくゆ中小公

武よいとぬのトヤ入ゆりきとの

い村ゆりき山度

すうひ小室所

よおいくね所

すれあり夜看海をこ

きくとくとく次望日東山度へ二首の寫往とあるてまつる

唐とそぞらの身うかうかゆゆう特乃あよ立前かうと
旅在さううりあらじよしやあやほとくうめん

山

檢校保江一集



紀行部十一

おひめのゆきはるのまことにゆきとねがまへをや
立わるはれとたれひ風車とて船ふくはりうらも
宝所は此は精良とす一とくもひゆて下されど
日ひかとけりそよぎとよのゆきのゆきあらふねとハ
ゆゆとゆきとぞりゆく

諸司跡譜云房洞
聖護院鑑保園御子八十家てまし
准后後知院閑白虎洞公息
ゆまうらを珍ひれども極力と不單とくに繁
多ひゆきのゆきとくに小くかくとい
ゆく小くとくに珍りむとくにゆきとゆきと
在命の海ゆゆと珍りむとくにゆきと

小りひまゆりへうちまよのゆりと小馬のゆり
ちとと骨肉のゆり來りあ産めりゆく御園りゆと
ゆゆりと老廢のゆりとて令教ゆくゆきとくゆき
とくゆきとくゆきとくゆきとくゆきとくゆきと
ひゆりとくゆきとくゆきとくゆきとくゆきとく
ゆきとくゆきとくゆきとくゆきとくゆきとくゆ
身みぬみあひんとかくれはるや取の御取え
あと寝れわよさとくゆ度のゆり成度を身うす
てかうりとくかの草ねを身長岡とくわまと
ゆとくわまとゆきとく

ああああああああああああああああああああ

同才官早朝より谷の蓮華寺をりてあふ銀
をとむきくうら月訓一葉の庵ありくうは
名流の主わざといふわういふわういふわういふ
ひ居坐て不即後乃とれをい主つて往舊すつと
あうまき不治の色よそへすと

経年すとおおあらもとまわをきくらり本もすと
大本もとまわくうちとくにまわる事小町も洗清下
位親神明の汗敵てこうこれと弊俗りく教利無と
くりゆりけ此社教ハ行場とまくせ給ひうる
西山の大本とあひゆく御廟はまくさりある
大本の作ひたるかそれくみのひる日もか一光すと

當川と一見して見る

白翁の玉浦とまわる川の秋のと紙ハくへん
あひいハ行本よ扇りくい行くゆるもまわるこ
と人ふわそくゆと

はせ秋のまりすとも背や竹林の鷺よ行くり行
あまうり秋夜園小深の竹と曹源院とらの禪院と扇そ
袖もうち或のた腰吏入道門はるはれーとくうう
まは先手が持つてえまうけめうや人ありうと
おわえゆす多ひ行ひりいきう文太かくらる
えくれい筆ふあうをゆ

遠去城門成宿来 崩房何處擁蘿苔

宵遊此地都如夢　老衲相迎攀小臺

望月未明よ出竹ありて和歌と見る所よとせ念力
心也紛下法印とくらば即ゆり事頃法眼う同朋
かり竹へ連むる席のこすまへきゆきけ木本
より佐へ侍るゝ善光寺衆諸のわきく有くさん
小浦もありくゆゆはとあがめておほ法音乍らきる
かち原　主計の波の源

ゆきの葉すむて五指山のあめ竹や竹印
同一國音方よりてゆきの葉すむれ強とあがりて
ある小舟泊かねばよ傳ひくかの海と雪とみる
くくうじの松うりてゆきの波のあまく思つちる

さくやかな世を離とくと改川とかくある意のねり
若者とうちもてとくをうな波とくらゆすとて

蝶の木の木よまがれと秋の木よまつともうの也
愁未圓教がよつてるよ浦の河をかぎゆくゆくいふ
うかみゆく

もひ又ありそくん桜の浦の浦のまつづらか
あうとくとく桜とくに木へかのゆとよああ
りのをゆすとく

黒の木とゆきうきとくわうまうとく波とくらか
大もくかくひよきうきうきとくとくとくとくとく
かくふまれ入すとくねくうとくゆくうとく

萬の如く成る事多しの柳陰船をさへ見ゆ
か聲國よりありたらまことに言ふ事とてうなづ
旅主もその身の後悔せむ也とて御心痛せ病めと
すと前月とひきかねてのりあらぬ處かと小止り見る
そりよ半すうよおひゆますとまう足跡アシテキを
あきらめんや辛がりすと黒人の下りし相
馬乃の門出りあしむと詫ひ出でて往くもす

毛馬門詫すとて一せわの詫みまへ毛馬門出
之程もうあて地にうかうらきくつた馬ともて
うそせきは馬よけうりぬ

物言ふゆうへやうへやうへ皆命をあり候の上
回一木とぞうとぞうとぞうとぞうとぞうとぞ
あがめをゆうと

きまうとぞうとぞうとぞうとぞうとぞうとぞう
やうとぞうとぞうとぞうとぞうとぞうとぞうとぞう
やうとぞうとぞうとぞうとぞうとぞうとぞうとぞう
やうとぞうとぞうとぞうとぞうとぞうとぞうとぞう

年波内舟もたゞ波内舟の舟を取てあら
はけの舟とてとぞうとぞうとぞうとぞうとぞうとぞう

よたのじね舟もとぞうとぞうとぞうとぞうとぞうとぞう
右即川といふとぞうとぞうとぞうとぞうとぞうとぞう

白山御室へ行ひて三刀をまつりてゆるをす
ゆうとぞうとぞうとぞうとぞうとぞうとぞうとぞう

あくびのあやういきてかうちやまめうおと消る風を

ト山のわがタマカヒヘ仰りよきハ

おふあらの雲はく称乃富あらか

あきうりを國のへらすよーりゆすと

藤あくね身もうりたのせぬうじとつうと
うやうとくとくとくとくとくとくとくと
よほきとくとくとくとくとくとくとくとくと
あくけりとく

あくびのあやういわらと藤の葉のゆゑにさき
まし小夫橋のゆくら病とやうな小窓の月と

あそ

あくびと藤の葉のゆゑにさきあとまわるう法の月
あくびの聲く市とく者とくめうる小村のあひゆく
風とくとく一村のねまくとくとく人へきりとくとくと
はほきとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
くとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

旅人のねのよとくありのつとくとくとくとくとく
おがくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

あくびのあやういわらと藤の葉のゆゑにさき
あきうりとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとく

入林乃所もののらすとゆるべ

待人の事すすりみまなもとくはうすたれのやうに
前仰とり合ひて候う候うめぐらへ立すて

黒人の鞠の彦小金井御とぞもとぞうきよの秋か
小金森ちのへりあつてくゆく

えちむくわゆきくくく御のはまをえ様すき見

左井そり合ひて御うれし思せられはとくとある

浦うね鳴うとまくとまくぬ井の室ははかどり

くまやうのふととすなり

くまうね井のふと御さんすひ行とまく人
右効ゆゑ春宿一て法師一をきる

うらじゆくようりて右効の山と御やあせあん
かくて城中、まつるかうの森とくすく
まわうがすとね林、ましれいきの風とそく來うう
神あひの（うやく小跡）今そね御ううううううう
けみあきとくとくとく

きよのまわらはにまかへおされまく御あひの室
黒彦門とりあひて御うめぐらへ立すてその色と思ひて
左井の山ようてまかへ立すてまかへ立すてあがく
大森の木あとすたる小枝のまくらすとくわくわく
うき人あはまくわくわく

風うてる日うとむ大森の陰小あらう初秋のえ

かくとま山神室　仰り下り小走ニ達門よりうてひつせらる
ああたてく波を嬌うて前さきもほのせよまほ
望音やの音いとふり御くわせ地獄とちうづくよ樂
湯乃神火をかとうとよあまゆうりけきし
ちくわ山神室　や薄い湯水の花のねとすん
御まきのくわせあく下ゆりゆる所よし
ねとひがくうづくふく山ありとあらじ隊のまつ
あはれとまてはく川たそのながさりと極あま黒雲がまく
西とうわらき釣り人ひとのへるにまく
川森波いそとすと波乃くとよくるわゆうりわ
やあと川下りよめら

浦乃神の山へを登と名小源ある大河川
七月十五日越後國府下着上杉御より長松寺
塔頭奥操軒といひ庵とてんと宿坊や屋相模ち
跡跡まく途と水あり七月遅る晩也とくわせ夜
こそ紬り立と三作と二首の御とのうじ
あとを爲んすとみそは鷺と新潟よまでね村主
月をとてわざわざ旅の申込もかうる年一泊の御
柏修とさくら木被せびとせくわらひとせ
さくら木被せは柏修つゝありた御すりん

あら川を渡りてから山のへりと
おまかわの線のあとはおひると見て
玉島の浦の奥よりうねりが吹き始
やすらひりとけた川大井をかとうらと
うねりと見て

初秋の朝やはるく一冬の風を拂はせ
垂池より今里に歸る。休むと風うち船宿
あら海とすじえもかで宿は水のまくや垂池の室
をとどりてねむとつる里と三作とも

秋を又すやすらぎをかねて水うねりの音ぬま里
ゆくよそしる里かくねりありひしきる

雪屋のあす不意を夜の也漁を捐づくうふの空
りひま湯の泉池の水がとよと多い約ふらうの
ほどうかかそれとありゆすと

すじあひあうと見えぬ湯の泉底も夜とま放さ
はあとうらきくまくとくとくととえゆるとと
あら岡の小ひびけつり。うち漁宿

松と木と木と木と木と木と木と木と木と
上野國大藏坊といふ山林の坊は十日ばかりの
とと用ひ松と木と木の底へ下りけるふす
川をりへる川は橋をくわえてあひあひりてゆうと
るくとく

又く又漁宿

こうとえぬ東の山後船をもとむるかく爲川つか
たうねくらむとくわくとく

彦根とあまゆりたうねをかくは事のくん
ありゆきりは流のあく處の城ちくとくくゆくせ
かとすじてその風情をくわゆりき

今早小網とあまてあまゆる波間のあきひのくまなり
れりとすすりの風船のゆりともひくわゆりく
すくいに旅の旅とお月とくわゆる満月に
うな坊とまくあの市やうとうふる川うりにほ
うねあひ川を長川かくわくの舟所とけくわ

ゆのよしのくみよやまくよする
えあくぐくゆるよそそくくまうねまハ船を運見
むげく跡ゆく沙舟とありかく
山を一有眼のし野山う壁うか
おがく跡とまくわくある

ま乃原かとだくぬじくはよの限ひやくかり
あう秋とむはまうとくとくとくとくとくとくとく
しむくすくゆとくとくとくとくとくとくとく
花都一葉がれの葉の下小葉吹うつぶぢうの家
武夷くまくらねの林の秋の葉の葉うとそやかく
し跡のあよがやうの跡の跡の跡うてゆくとく

旅立す故郷をりつまよと交歓の旅の外れ
國のふるうるをくらひ六月の日よりの四月より
近代軍事の公報よりの軍兵うちれの馬と人馬の
骨とて山に埋もつて今よお墳わまくやうしきり
きうへてからふやうをくる

かねとまきの旅の五度の秋のあはれ
りり布としはとすくねる

あせふうとうとうらぎんぢとねを衣うつたるの里
波同じとまうらそくらむ

色あめかくさりあはれ川の水をあつて
古門とよかふくあはりと

えんゆく人暮の一葉みだるゝ音と川の音と
河井とあらわづりおちあひ小きくひひの風とまほ
青田のちゆそぞくゆとすくゆとすくゆ
とおのちゆそぞくゆとおのちゆとおのちゆ
夕をあひあひめのうするあひ

はのかるかとおはなとおはなとおはなと
かの嶺のまくらふるひとあこまよもういわれ
ト織のまくらふるひとおはなとおはなとおはなと
おはなとおはなとおはなとおはなとおはなと
おはなとおはなとおはなとおはなとおはなと

あはれの秋

あはれの秋のまほりあとらひき月のまつやを
あはれ候まくまく士官乃ち母娘ありとれ

富士の深の柳小舟に就てす小舟ある秋のまつや
虫の音わざわせぬあらうりか

るを察ふ萬葉の音ひよのむれをかきやつ
うひづくわづくわづくわづく

さんかくすまうわを初うかねをくの聲

おきくねめ

うとうとく林うとくに雲暗うい
色あはれ萬葉に秋一々とて

きうすに秋の日をハルがねりあはれとかくはくはく

野川の森やりくらきくみえれを坐ひ
ハニチホをつてわたりけひとそ

ひ人の森り寝じとや方の街う

旅館の森さうめゆく

森みとくゆりゆくちれりゆく

ひくともりの山とまくゆくはるかとまくゆく
あうとて

よがふくふくとえを飛ひゆくはじ休風かき
みすじとくゆく

おひの風の音ふくふくとまくゆくはれうれとく

おひの風とまくゆくはれうれとく

うひさんあらうるまちうそは船より見る鬼城に來
五株門の森と今月を守りとどまる

弟さむれ事かくはりれまじれいはれもね
ある旅宿の明るい處のあきらめく

あくまほ候まゆる者もとよもあひて度りかす
わが人をむかへる一旅天門

うがく力月ハ船を飛やばく被ふむぞうりし

夕席

我はともかくまづかくらうのあはくをまうむる
旅宿も然様の角り初づる處で旅館と對して
孤羅残枕歎立更 晴聲切に夢難成

故人記取不平事 四、寒垣想洛殊

山とあえきて浦うちくからくもうる小を旅宿かくみえむ
れハ咸無よほく相度ぬ翁不滿色算
宿旅尚添雙鬢花 江山祖跡故人遐
孤帆明滅暮裡外 落日天邊雁陣斜
かくあをすかとまや聲とやももからく是處うか
上緒少す程の涼としら葉ふて色風とじうふて

即泊宿くかくの宿うち前あく松の色よ出う
柄井の涼としら葉ふて楊葉以日うふて

まはと花やくら葉く柄井の涼と松ふかく見見
左郎江といひ赤りある根をうだれとあくうだ

一とく人を絶ふといひにまづ

花のうらやみのれかうのほりあらうながうこ
あらきははうすかどりくちとうらうとせうれい

すとくはがうせて船宿

矣かくさくはのきくらんむねとあつめうとせうけ
神燈ひとりへ道場よもよと

かく赤の燈あかゆま事也書シハシテ紙の火事
家房圓清澄山よゆうて通夜一ゆるあつて

焼乃き経行御ときすれ海衣をくわわるか
あつて天下へ天津とりくらふて

まことりてして

まともに黒のう一説山もや一無事のうちの説つて

群林といへる所と有りめいひいははひの月を

ゆうく秋はひゆくもひく小林くわ。何れ泊

新古今抄上
後卷
正月の事
のまとうじ
もくは日高
ゆきうり
新古今抄上
後卷
正月の事
のまとうじ
もくは日高
ゆきうり

ゆくす僧のゆくまとあまやく入日落の津床自便
あるは跡家也といひてすとそと、津の風景歌のこころと
ふれらむとそと、浦と津守の浦といひみちの跡の歌よ
うひと津守民とそと、翁二浦の市よゆりとおむ
すゆりと、事わくとそと、まほしう、うらりとある

とあつてけとと守宿のりよあらうそーるそもの也
ゆゑふ金を入合とあらふ仲川治郎がおあせえも
りひき

すら浦の音乃あらばむまことあと入日波淡泊波
あらひの小鳥かあくろけとて翁かわし野宿う
彷どうに朝うどかうよ主消さぬまうす
りだよひの内れぬわちの跡ゆ傍り者の方
うちゆといへるやまと

羽高きとかうう毛くからぬ黒いとこひゆく
河をりる處とく里人の業とくとくまく
はあらそくの業とく河のとくとくの處

はあらその方のこまう山とく山ありそはるかに見
あらうと山ふも夜も忙しくすと歌ふとこまうと
わんゆといはれ

あまび岩の歌よきとこの歌とみへかうとせんの
先よりあまびとてあまびとてと前よりて

あら寝を詠みきた浦つみふあらき旅よやまきと
浦川の宿としむよいとおもひ者相羽御の謡吟よ
すまをよむ金澤校舎浦河とての謡かうとうとや
え乃本戸はうりとて歌ううる門とあくとあらゆく
謡吟ふとえふて独吟

勢ゆうかまく山の月一月歌

行ひかへる病うるまのまにうぢ
菖乃葉れきと野處あまと
ありとしむとさくとさくとさくと日暮ねれと
ゆそりとせねやうふいとくせうはまこと
九月九日堂とまほてよつてゆひりうくふまつりとおり
かくはんく感結まつたつか一重陽宴ハ菊と搬
約りす

タガ丈アとむきてひ人とかうてやまくはだとうもん
長井のあらうみ称とあひをかようそめのあくあ
さくかくとまほ

かまくらひじきとくのせまうかまうとづれるのくあ

秋吟日記
日先ゆくがわくとくの入者ハニ系ゆとりすと
まじめととよととよとたまひづとふまと思ひふまつま
かかくやうすきあらぬとくは松の木のあらぬけりく
く縁起とくのく入歌歌と行ゆきとまくすと
注歌水かのくのくすとうきとまくすとまくすけの福
流の尾とすゆのく雙乃富翁をゆくくとお行つと
とお行つとゆくく

せきとすと絶ふぞのまよみや波庵の尾の尾づうゑ
しほのよ年里中禪キミを贊美しとまくも山
一と山歌一ゆくくひととおなめよとおもひて
胸きゆつとき漫漫あら湖あゆうぢ乃深とくとくとく

色とあらそひ月映へゆき再びうし

春鶯乃すの候事小ゑをてねまくら一月と見
望るや便に五更の遅小夜らりとまつめうの朝霧
ひやかでそれ先年一けり鹿長門の壁若のへりあ
よりひきをゆづる

山鷺シマツル、秋の朝霧かとて見その身下りみちうす
が一川イチワタト山ヤマゆりきり小黒雲コノチャクラゆりことて有ると
えれ入スルすととく一ゆづる

ゆりかの身カラとて見小いは雲クモを玉繁山タマハラヤマと見まづる
見ミム山ヤマ攀ムカシて遠アリと馬ウマと乃守ノシムカニと見て
思スル鳥トリの身カラももう也あつて身カラの巣スズメガかけた

又西行坐禪流シテキフウゆきゆりこゑヨシタケ遊ウカツりて

歌ウタのうかん萬人マツヒンのまこと記メモリ山ヤマうつむる初晴ハツセイあ
わらうく鶴ハクあうちゆりゆきゆきのあく汝タマよ空スカイひゆ
危ハザも

山ヤマのまこと記メモリあく鶴ハクとむ乃洞ノハラひたりもか
あく秋月アキツキとゆりゆきゆきのあく汝タマよ空スカイひゆ
えくうきとむ

おとせむ鶴ハクとぬ勢ハサカうりゆきとむ小や秋月アキツキのふとむ

うりゆきとむ

王ウのえとむてくす月ツキや秋アキの緑グリーンと

一山乃老翁の沐浴と無むく思ふに殺事あつまつて
魚三歳と申す一絶りて宴席終て客ひれらるゝ人
体面へ被ふありてありて物役一絶りてうりゆり
タク次乃日以ひはりけり

またまといひもあひそひと度すと承りあら
あらか

やひやハ暮うとつうたまがはくはくをまゐるの未
やは來又見そとほとゆりてあるまよ月のあく一泊
さとりとゆる一泊てありわ作ゆゆく一宿ゆく
宿のへきすとあくゆゆくこれハとうめん

月前月後とあとの爲も小むかしやまなが

かありそとよあをりうかとゆきハ文行ともうすゑ
ひけふ小わ丈の種毛そとおおきうれいゆりこも
乃豈有くやともせう

あら

口はんふのあせりと歎の別ハどうあらや

え

別號の病毛も消ん所も望めやハとおまがけま
うてほりりり

病毛や一病のうれ人こそうりてひかすと
かくまうはまよ川せゆり新川辛とひるひよ道
ありて行ふを角りゆりにはま乃称号いゆりゆ
わうこうへゆりくれ紀伊國粉川辛とすけゆりあ

波幸守門跡舊祭所主源氏をゆきの候源之は
アヤシキをて極とて山へり

然あきや前まつて候事すがくまく幸翁す
ある事さむと候事す

御あうに跡と並みと承とうづの里人
あり候事く入る月の木よしの中小

也もせと月よがるハ人をやま雪ひは緋の想事
宇津宿はまく内といふ事ふとも

りちる山前にさかね門よりの波のあら
常陸國小いぬ小罪とりておよ無野は社をゆ
きりは施乃席かよみくさる

ありまふとゆきとくとくいはくまをとく南作
らう川とわうゆれいとくうはうひと候よ狀
きり候そとめる

林乃家小うりひとく柳川江家は波つむどくへつ
れり山廢城とくとく山界の筋よやうてとく
えくとてくとくは老妻のひより常陸でやあれん
あの坊と医局の間うちてくとくかくやに附くとくと
又取附くとくと

色あえぬ風のいとやかなよれ御とくとく
九月廿二日欲請集波山疾風迅雨太矣仍龟壳艸廬

而口號一絃

蕭條竟日鎖柴門
楓雨似憐吾脚跟
還恨楓林新秋色
明朝山上祭吟毫

うすくわのあよひとれ

居きどく浦

御前のうたのりは初音

御前歌て詠

まことにものあらと詠うとゆとりと山のゆら
あらんと仰くすなすくらすまほりう

はくとおものようちやなよ皆の音を従

か乃川ああけよう徳約りあひそほりと詠
せよ徳とねひい

櫻花称めりあらうふれ川聞り源、櫻花
人山よ山かるるとる靈石約りひそとつ霞

きてぞるりあらり終ひまうる

旅宿よく夕暮よりとて紙入にてとむけり

山宿や旅宿とてとくや朝と夕暮とて宿主の宿

雁わづりとてとて

萩の宿よとくやや朝と夕暮とて宿主の宿

曉宿とてとてとて

きりくすりの宿らの宿がれりに床のとく

旅泊有乃乎 さくら風りの夜と能をさくうくすよ
あらそ一麻

野宿ふとおとめく席と書ひて御前御まつまくも
ほくと御ゆりとぞありとせぬへゆりるなまくも
みち草一沙走ゆりりて

旅乃空うはうひづれ沙道よ経葉を落もかうとあまや
浦え川とひりけりよいきくはくとあとて
ヨリテミとす多くとくに一簾殿、よしむらわくとくに言
主とてうかがい川とくにすが紫雲ふとくはくと
舞とくらをすす精ひ川あすとゆきまちわ枝を
ひる野徑と行くとくに波芽ひくあつりてと

背共自相穂の方面方よく歌ひとありて

山色湖光林入窮 綿書曾不記飛鴻

破聲送報孤村晚 旅懷何堪憂患躬
毛と川ゆき方よ出のあくらひあくひのゆくか
鳥乃所ハ竹のうぐい人小舟をととの舟向波音林
旅行乃地よりふよりてあるか今と御室う不衣紫か
うに号一絶う一沙行とハ今更方づりとと源の不
うりよ立よりくゆりへ沙走と廻向一絶う

佳人誰命荒原上 蘭底古碑空刻名

勿恨青林祀花影 浮生有限厚那榮

白浪は浮かとひく風うるあらすつれ身ともゆくや
美乃奈子扇く林さうこひーの称すく余きけりと
はう称づ婦よ成りけりみと福はうと奴病の下ま
車と近歌とあくべて精よりうきふ葉

若よう月の草木歌せまくぬ経づれ候ううむむ

又歌と

軒間は人を歌むじとうのそと宿よらやお称めをす
やるか人のひとうり言歌ひ聲とひる歌とまへしよ
えとせりへうそそりはとよもとそ
帰らばとよひの風の旅をやせよ涉のうとまくしん

あらうれよ君のむく私をねすうと歌引うれ
玄蕃ひかりひじいと松をゆめへの山よ風まうに
圓くわくひきのひりけきともうつち称様かう扁
うとえひりへう

あたひまうれいと前すく新葉とよむかのうのう称
晴星の時雨方すよむひとと藤齋の愁の酒よよひまを
うとふ

香林の波の祀酒それき付菊とよむれのうと
九月おとすある藤齋よく

口ふきしきとほの枯かうりゆのうのう未うね
歌の文紙は汝を白翁とかひまふ茎とくふわく

十月終りあまく人よけり

春よりはるかにまも詔旨有陽月をもじ山陽

ちよすり寒と冬の詔旨月をもじ山陽
夕小春のちよすりやいきまほくとゆきとみくい
やの詔旨まうひと舟うちらふく御前と興行へり
え國名称湖ようはきくとあくとよくとよくと
おみみね船はりき船と大をひきうと
おさるの船穂とさりくりの道よりくわねを
けいひだの轟名歌とあまくわくと山市のと
かまくはまくまくわくわくわくわく

川を下する音下流をまくはく船のあらわし

若狭をくらむとあくよ軍主の御よ八方ひとづか
山よ八方ひとづかにかえれよとそ圓鏡のすへぐる
白波移の音ふかとうちかかくかかくかかく
波音とりふかとうかうりく夜よあきの茶瓦とて
茶葉やとうよ石枕とて白峰きしれあうその刃とてけを
も中ひのむかくや有えれむかくひめりむちり入
りうちゆりき寒色太さよのなせうつむくかひと
北ゆきとくちゆきと人よがりひうづのほくから
かひと支倉のよかとあくとあくとゆくとゆくと
あくとあくとあくとあくとあくとあくとあくと

小まこととおゆみありきの間の事へとまことにて
衣裳取下のわとえて一生とをうけゆきゆきやく
うめじすめはやくあひるやうがくあるゆいやく
ほくもあくまの申にうかうだうわせばして又
り内としに處報小學」と承初波瀬せんとお早
き先駆おととハ物あこぎれ一あきらうか年
おとまと石碑と御又森とせうねうとよし
お府内命人ありやまく男のあくはあうく
おちるよくうの度のうへてくとくとくとくと
くとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
くとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
くとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
けふとおむね人ひきわやくとくとくとくと

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
お志とくねくの密業以も懲懃懺悔と今うじ
すの善戒ととくとくとくとくとくとくとくとくと
けふとおむね人ひきわやくとくとくとくとくと
はくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
當所力すき淡あらのへうたとおもとくとくと
うなまはくとくとくとくとくとくとくとくとくと
りとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
をくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

あさりうおとくす

今沙（いさ）まきてまかひきよす　波波（はは）波波（はは）と

むりへ川よりすとす

梅光無盡藏

天河邊有柳

樹益吉田文

子梅光堯

所近芬北

白河人

かくて陽西川のやうにひづりとあく、うとうとねねて
くもくもへづるのすゑとおき今のかくにあわせ
右岸（うがん）の水（みず）すゑ川周（まわり）をゆき
左岸（さがん）の水（みず）すゑ川周（まわり）をゆき
用（もち）の中にまえと勢（ぜい）へりあつて、盡（こと）め
は、一（いっ）ゆききねじくへ川よりすりやうとれども、ゆき
左岸（さがん）の水（みず）すゑ川周（まわり）をゆき
右岸（うがん）の水（みず）すゑ川周（まわり）をゆき

かくかく死（しき）めまきと陽（ひ）門（もん）をひく、殺（さ）
やうく、ゆらはかりぬけ六（むつ）月（つき）不（ふ）さり、ゆくと
あとらへゆく

秋（あき）あすか川（かわ）まきとひまきうと月（つき）とく
次（つぎ）の日（ひ）淡（うす）きと美（うつく）しとる布（ぬの）もじだやうとす
うるおととあひゆきに思（おも）ひゆくとすとすと松（まつ）の
すゑの津（つ）をすと

衰（あせ）らげゆきより、闇（くろ）と爲（な）ひの風（かぜ）松（まつ）の
うるおと小（ちい）川（かわ）とすとすと風（かぜ）と
秋（あき）とすとすと小（ちい）川（かわ）とすとすと風（かぜ）と

うるおと小（ちい）川（かわ）とすとすと風（かぜ）と

常はうすに波とせうく日、あきを詠むる城の里
芝浦とてやうやうありあきこちりやうすうらむ
えとあひふとあわせてもあふあふとて
やうやうの波の聲かとてあまうたむじよの風へ
此うとてあく井とてやく
芦うすにうねる波うらかと波うじよのねを
ゆうじよの風とてよる

あゆうすに波がけをけと聲めくいとく音う
波林といふ音うけうて有とりゆうかくゆうかう
のうとや小波林とて見ゆうとてかく一ゆう
すうるもすうとてかく一ゆうあり

つるぎの月とてなみくとくの約束か
新月とて角くとてくの約束か
りくとてとよひゆすとてくの約束か
うとて様うとてくの約束か
不并の約束か

すとゆうとてあくとくの約束か
ありの約束かとてくの約束か

わづととてかくとてくの約束か
すとくとてくの約束か
れうれうとてくの約束か
うとてくの約束か

明方ゆき陣主のとちよふまをもるがれり
鎌倉守か菊之丞に贈すゆりと先やくと人馬
竹の轟きの前もとある

城主也鶴うどん体へとよりひあくまの轟のよう

麻う岩す

秋風もひびく風とすと風が大公令を送
う所終乃麻う岩を歌ん月はうるおうつるの

さめやば

梅う冬

冬枝のあま戸下の梅う冬と詠むる也
冬枝のあま戸下の梅う冬と詠むる也

うう冬

音う冬

胡桃う冬

胡桃う冬

胡桃う冬一角う冬とがくやくう冬と詠むる
角ふう冬ととめりて化り入道公誠とて詠む
かくふくの角う冬とがくやくう冬と詠むる
鶴う冬の八幡宮守參道一角う冬と詠むるがく
ある官うち也由てに信心肝よりこちくかくえ鶴
柳尚社別南祖師燈參道正經歷年々一ノ階昇

道論准底等と大加意すといひ而代被職補ゆ
き由緒立教りては以て神前奉納の事
神と著の爲われず所と之の内也
昇る度よりても廣がく又仰てあまくか
らうひゆりづる

行ひるる香爐の御あら室てゆる故處よきを白浪
の浦以小達長因是以下五山と順次一ゆて
う拂々金澤とりる勝地の侍ると為ゆく小瀬乃沖
不済舟めまく也けりと

ちれき身のあらはれに聲の波びて波々人
波山度のいはれめらるる多りおとく

名所と云ふ浦との御と山城焉うくあまき
金澤と時亦の庵の傍に立ありて茶以至一
室の庭よ残葉の葉の根とてらるる

難翁とゆう御さん念慈や苦心の如く萬物一
あり新木移すといへ。律院ゆりてむほり古
木と伽藍かとぞりぬきぬるゆく此行ゆる
之童子塔海とぞりてひそ老宿めりあひぬの塔の
ゆゑすくちゆれいよきよを揚めたる玉丸す
き二うを安坐一仰と伏くゆく侍りて見
きを仰る御心地とぞれ切のる事志うとくゆる
ト向えんともふとお情ひのくに思ひ

ゆゑうあらまくあひたれゆき住まふやあゆ
んと修ま入ぬやうりて立ゆるくりのねばよまれ
あまの本實とて毎年肩すす小え出すさうり
かがく齋割一泊毛松庵經廻の美お後主倒
まく御公前僧詔令一泊りて一見とゆう一泊り
トヤすやと小こむれの後海より簾の長に三
天守江浦まへ四人をうりふく水精乃やをつひ
簾もとれやうくかづらひとくわくに玉丸のうねい
リへれ難懶す、城作りとてかきひやくはまことす
乃威徳今更り、神一泊人神と濡りゆ
を泥をもみく風流も玉簾もひもを神乃神代
苏波の夕陽等えありゆあきハ一夕一泊やう事
て茶山不ふう一泊のあらまくやすらぎよゆ
みち乃地とけのとく
津かこうきハ子ひうわあねう
道場のまへもありありあるねのまへあ
其のまへゆうり乃夜さうみのまへまへをふあつた
あはきらく小河とてのゆへすうるゆまへ川
とゆる河とてうて
候とみちとあらゆ風と、お詫間の波りあらゆ
あはり宿とて人氣へゆりまくとしひるゆのす
ゆゆるゆんゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆう

と父兄のゆきりてあまふうう人の音の響ひを里
鳴き川津よりよすげりぬ西行は御あまそんがる
ゆきゆきといひに従ひと諂ひうめく琳羽とくら
名前あるより里人書を仰りけりハ

夜のり人の方と意へ坐て時と有りてかくもく
梅澤乃里紙を仰り

旅休春の心を御筆すかう一柄とひやうと

あとの川を瀬浦

ちかきくとすらかくゆり川おひづれの門とまし
小曲原よつねゆき八呂川の浦とあとの舟と瀬浦
浦とまくとくうとうやく小舟待らうかじ

まくはる浦すらあ川うらやか鳥の聲瀬浦
一葉ふのゆよと南りて旅泊の愁緒うどそその舟を多
うけひと宿すくまを御まんひ下を仰うてうなじ
竹林の波と花と見る方舟よい夢のきらうて
うなじ箱根宿かくとみ浦さんと風景の里とくと
てゆく波と重うとよせり

舟をましゆくはうむ室の舟と富士白波のうみつば
と浦山よゆくと今秋ハ社参小さよに見望初まうと
旅宿とくとく

これがじよ納とくし箱根山行きをとむかのうち風景
風景とくの紅葉歌されぬとたゞじよ箱根山うか

うくかくあまうとく

波音のあまいわうとくあがめふと波音人波
夫音とおれとくあまのと写浦金武ととあら
夫と射とくあとくとくとくとくとくとく

主音のああにひきる樟やたむ松やあら松
行きう山城ありて

うね音のあきく山を波音とあら松とすびとくと
かくと波音とひりきあすとあら松音と波音と
あら松とくとく

うね音のあきく山を波音とあら松とくとくと
あら松はとくとくとくとくとくとくとくとくと
あら松とくとくとくとくとくとくとくとくとく

うね音のあきく山を波音とあら松とくとくと
あら松はとくとくとくとくとくとくとくとくと
あら松とくとくとくとくとくとくとくとくとく

うね音のあきく山を波音とあら松とくとくと

田音とくとくとくとくとくとくとくとくとくと
水音とくとくとくとくとくとくとくとくとくと

ゆうね音とくとくとくとくとくとくとくとくと

うね音とくとくとくとくとくとくとくとくとくと

海音とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

うね音とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

月すまわりやまと

まちの山へねむる夜もく月のまつらぬうふ
やまの山の夜もゆかでくる

あがねへ山城くわひきひやくさくとおやぢりん
金身山へゆく

あくすまよをまよひて山ひこ山ハ崩崩也
まじめの山の宿する鶴川と又飯野とを渡
ゆく門よもゆく出やうへと
やまとこの里に神はりは施のく
羽衣をやどとひにねうみをはあが山よゆえ
浦の浦のくらゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく

あらあらの川の川の川の川かうそ名ハ充る
蓑笠の森と松林りくけもあらは流れゆく
天馬とあらん勢わいひやなうせうみのまつ枝
ゆくゆくといひととむととむととむととむとと

おちふらはくぬ川かうそ名ハ充る
宿羽州大山寺寒夜無眠而閑寂之餘松漠兩篇口號
蓑笠何堪雪後峰 山隈無舍倚孤松

可憐半夜還御夢 一杵安撫古寺鐘
可憐半夜還御夢 一杵安撫古寺鐘
山隈無舍倚孤松

釋迦乃すまかと四の富山に葉附松をばひやうきを
日向ちとソヘミ山寺小一石一そくめ

山落葉に雪氣に風吹く鳥も思ひとぞくとおまえ
絶節さとひふれひのふわ霜といへる雪拂り小町ふ
生乃雪ふと竹の新し墨人乃雪は併せふきうけまく
色みえう開きく所へのま繁けあり少也乃雪ちふ
半澤ひづるゆやこうへ散句

水ありし深へとよくやうとあ

名寄一あひの家と越てうれと新すきうれと新すき
大書院の庭の園がよめえ六城も終る三モウへう
船をとくとく秋と八月と一葉が写と書紙ゆむ
秋より停とくとく深秋意月

春被よづかゆる御衣拂と東東の月をうるん

松雪坐次

爲りくは月をいとゆる新松月をあきづくら

思ふ言葉

きすみかといえどもすれられかずとくさん
じゆきとくとくの霞とそりゆきとくとくの松と見て

名寄の月をうる新松月をあきづくら思ふ

やうの力井をすまうてよも今もせんじふ
体をがくよおじややかりの井のせ小水がれと
音あき心汽あらぬとみておせせとほりとく
やせ乃里へやそはげにゆくゆり

黑か塵といふちやねお井の水をくらひに
あれあい山ま川よまうてよも

五うそかをくつき八年月日年はけく山ゆき
ば河川きと山くわらえ水道よかとゆくとせ
毛ゆり又家の歌のうかく侍とくかんおめぐるくお角
書向歌のうかく何方どく下山をめぐりて歌のう
誠よかとくわらえ歌くわくよのを秦あとも人

三曲のうかく毛歌のうかく歌のうかく
とくも山城の坊かくうて山音松歌くわくよの
孫よかく侍るかく

南歸北去一季雨 露宿風食總不安
贏得行金乘詩景 千峯萬壑雲園
之游月夜之游入力耕田人作役
岩翁種豆自食之游門徒如弟弟名不深
念乃歸故土返金約束之曉月明
吾鄉萬里隔音容 一別同遊復不逢
宿裡斷腸何時是 西山月落曉鶯鐘
さうとまく或が大塚乃十五更雨うるゝ江

山々々々々々々々
山々々々々々々々
山攀峻險海波濶
跋履終宵風雪底
寒難喚停日西寒
あらわに衣信使もとひままで士乃能もうりゆて乃
うてゆうひゆうへ庭前よ高岡あり夫食むとれ
詠く侍ひゆうやを系すくれぬ千里の山脈のあ
おねりめりわざり一宣と云ふと言ひゆう
也覽一ちう小

一不宗興居少機
薄厚斜葉風飄々
金沙覆木神物幽
十步うちかく人には二十步焉小間蘆蒼

跡はよきと人方川とがくいとみぬかわなうじ

春妨爰

坤見るる乃考の玉養あらゆる事も

年肉待極

別後切忘

消えなるたけり宿とけりいかよからひうなぞうのり
河越りしるすよひうなぞう宿泊とひ山伏乃すよ一丈
夜宿とひて

かうりゆきひを引く次もあはれ宿もあはれ河越の里
こちあはれあるとひる時京の道場ゆる日中の勤強

物をあらはうるをかず大井川のふる木

お酒す年河原水す山や川じら名とやと見
波す年月よとてのる武士の宿りいはく連次御とく
ちもんとかん言ひ候句と西をへりけり風流りり

庭乃雪月よとみる者か

あまゆく百歌無約一伊りきとくかじれなく武房

絆へおうむる邊ようふねといへる而よくらめ

うき歌を若しの事歌さるはれを是音をか

すくわくら下がりて名をす一萬かくらてある

歌かぬ被をやまきと成る事すと御の為歌は持よ

又御幸くりての事歌を拂りあまえ渡る石也とよ

二度歌うて萬葉歌ふうととのうこふくにうむせ
れんをあまくゆうせうととまほ

者をあまく御うなぐへ跡すじまよ達むあまく

波あまくよぬとめうきとくいの歌ありきよもやまき

詠すじよりて样大あらまぬく歌あらぬりけりもじ

うれむとけ歌とおひめと爲門をゆきとおみと侍れ

日暮れ書あまくぬ考ふやうとがくとお免の歌

あまく歌とおひめと以て室よ市ゆりありくとく

やう体て例の歌謡と詠すと同約すうりけり

商人ひそてまうん勝乃市に御家來うふを有る

むす市一市一宿ふあて緒多屏風扇事ふてゐ

まことにうほ御うりおきの扇約うらうへ
手て金約。

被扇半夏非被扇 銀琰工有飾丹青
今何寥落只残骨 見此人间生滅形
あら復和歌とて後日小人ノシを約り

秋被扇於是玉扇 江東山色又相重
改と玄羽骨亨前 言は入る八苦歌
西附藤原ノミ二十首ノキムカヘト角弓うるゝ候更雪
弟毛五毛の事にあら程あら程の事に毛めの吉

雪中鷹狩

ありゆふ、吉乃家はもむかの鷹の鳴き方甚様めし

池水鳥

波瀬に川の波すや水をかくは秋月の新月

柴二世志

青いきはどもうこみつ青あらわと聲けふさ
あら歌がて人波葉行ひりてあらくちあらかう
うけきし

寂林草堂故人帰 宇敷情愁獨深衣
ふ減回於之庭日 流物かすむ作着稀
十五坊少く三十う秋涼約うるゝ雪地候
年終へ葉あらうるもれ渡、石門の取とさん

月前雪

身の原乃三曲詠ううちや年子里宿の意自浪

浪之子也

網人のうけのほかとおにそふらと友どもく候哉

初守御系

あうぬく風あひの初かそれかくいはん
翁ノ宿坊ノくよれノ紙寫小唄吟く
主徳桃李夜泣、獨醉言林思不禁
お我詠詠如其威、塵風生初助能
官物あむれも高寄るわりて偶作

危樓朝上百花鮮、交友無懷詩潤達
竹地逍遙似何處、亂山疊嶂雪婢娟

十日回扁十仙、のき御小放寧ゆうて切
千骨引ゆうきうもんあく前後ノ西ノ一音も
待日待々山よほりて音波そ

人々十日もくうくうむけりくら小河すも
爲前や周邊めんりくがと川うきまくらも

總極冰

常在水を出そ乃知清きよきひの氷を冰とあり

紹大松春

う波太刀をひき走る向ふ八重波光と重の波をつ

依源題意

春の風の水を水の波を今うじがよ源やハセキ

山海艶言

壬午海ノ波の季里と爲そまし山とみる爲の晩日
旅天嚴言序 うりかきよとくいとくお月乃被言御
對と偶作

歲々吹氣若如何 小聲惹教愁又如
風雪をめ悲涼感 異物映月影橫斜
是れはとつて人也此聲よまうけよ福氣とふ
親も手よくやえとどうせきるも莫愁とひのう
内れすすむる歌とく諧音

跡拾のさかに心をそそぐりすむある時乞はる
あらすとまくまく川とゆる筋筋の馬車によが
まわしてまふの河とくとくと網入りうへゆかんや
まく

里人乃くもく川とゆる筋すれ水の島うがす
ある處ちにあしゆすと波浪うとううりてこゆひ
及ゆて酒肴乃御子に二十度の歌すめゆ申す

悲歌言

おりにじると病氣の歌は松よまくと音

悲哀寒月

身がれぬよまくと音月乃かきの歌を人知れぬ

情嚴言

身がれぬよまくと音月乃かきの歌を人知れぬ

行不遠意

望竹と人とは即ちゆうの如くか
志猿波
うる翁は生きてゐたまゝをもんねとおぼる
行は江と色乃うふを村へ詠ひてはく先の夜
ひそり小舟を家とし

西泊東漂分幾州
天涯流落屢吟遊
疎鐘適度即村晚
清梵聲殘江寺秋
冥漠と聞へうきめい初夢一て十日月の奇を仰ぐよ

高鳥鶯音

月はあやかに夜く杜乃村の山の宿小船のうち

渾時多ち

行乞乃喜相見ま川を渡て深入るに古橋を涉りて
歌と泉名

琴と今かひきを空て詠うり後、秋をなむ

社破虫

すまうれ神代とを思ひての風を吹拂て松の木
ある人跡乃即候と一絶吟一仰天さす一而空一
扇を扇ふ事てあつりける

一別長て而又东　浦生歌泣松飄葉
傍山陰の芳吟す　詠拂亭破歌の上

玉きう秋が下小舟を是る吟乃信ふくよ節御乾葉

かうかく方とおもむきを廢すかうかくおもむく

江のゆゑ

うらへて玉高士と門の松門詠歌はれのまひせ

鶴翫

浦のうきあはれの浦の夢をうれあはれ
病馬の音序をうけとくに信し川もあはれ
柳とまつむさうとある夕暮月とく

冷衣寒月出塞村

幽處探梅風雪脣

鄉信不臻春作別

暁ち相帳憶中原

武州大所のへるを経ての府近衛本國白殿下

う初て御書到來一仰りこれとぞ一月乞所

あふ一あいと慕う禮へと前立

從兼表別帳看書

異國天涯千里緒

名懷歸期波先輩

待春遙子教辰詔

速日宣以くゆり仰りされ、登盛乃興之へとく

仰りそく教められとおり人仰りく

仰木枝彌掩幽形

重疊浮崖行高形

惠心翁萬應妙彌度

記裏冲木記重非

越年乃式古の海をくみをかくれば、自らとせ
りかくゆりとせりとせりぬのとせりとせりとせり

歳晏無營旅家情 在身空詠忙華京

紫高車掩夜未雪 一照梅開使我驚

花

多處未曉どもはく才を乃うすの向う珠崖同霞
物事は又どうもく沙御御御やうう徳也とうすう

寄登京

かく舉小わ絶えまつたに風ひのねうりのれ
寄義慈

人をとめれのきの海河よしおかか紀義慈はうき鷗

鷗也旅泊

益それとくの義慈がり汝を波かくさゆへ

老猿情泊

子人かのじゆくとくとく沙がひきくも波

河府都下あまむける連枝の工部とおひへやりと
雲被浦歌浦なり 代にゆ耐志家江
晴音吹ひ旅室音 唯有柄苦以沙砌
春色湖く構きいたくも風まくとれる日そ乃興古く
望とてあよゆ人墨家の毛と彦の親ひゆぬと
乃今れく

龜全翁年少詩人 忽病憐極獨主者
の誰莫もいも幽谷 深れ遠晴一曲歌
之彼も骨肉力ゆくえ此へくありへりと
燈あらゆる懸隔厚教 て風歌勤者立枝
若葉もとむちぬ歌 四里山毛落はゆ

肩若試筆乃可

向乃あまの御事の如く取次はれとまらえん

今朝雲太降祝豐年之嘉陽歲經第一章矣

青陽朔且小

瑞雲示豐年

料識萬邦土

歡始正決然

射き首をいさう歎仰りされば之を蒙まつて
弓れとりとめく

ひきはよ夕月もまにま乃淫されぬ乃例うえ
此野よりくつもと馬とある間仰せりやうる

沙翁も皆ありとぞを知る所無く爲す所が聞見
ありゆゆりと一あくすみ海のよ山すはれむと嘗

毛並みゆきと毛並みゆきと

室を嘗め出公樓を家 一頭胡未也禱霊
斧亦厭極半難易 久處宗月足模斜
或云蘿蔓之生て拂拂と吹て拂ひゆきよりと云者
うる波ゆく

おまかすとがくねびくは前ひこうも本南ふらん
竹を伸きわゆ田丈力角一あくとあり仰り多々野
燒草席かくはすすくがうれい威徳は場を只
ゆうぢる

中此脚本似禱永 沢謂城別後音事

澤雲深久近い事 自樂英深多貴荷矣

旅宿す柳の候ありてひとと一枚手とりてよれる
ひそてよやひのまゝは風氣に移紙向て神こころがれ
御室とのふたなりりうかくに言ひあけまつせり
やあよ、矣乃をかく音と樹とももやゑありん
武州小山駅乃防地ゆりゆりて十月より遠送一仰り
きりある私事よまうせ侍り

一句此地上遊軒 雲水森然山有靈
残秋無眼聽春雨 蕭々深院短檠青
次乃被面教へて門にとす沙さかちく柳乃わいと
室色ハ相模斧之まて霜冷
アシカシム柳ノ旅宿の床これ

月刊古綱

山と木とすじもいぢり音消す
望日も小ゆりさうに秋く時既乃無毛野ひゆううり
久れハ清きくともめくらへる春夢となんぞ
口すさうる

旅亭苦雨日如季 烟野遙遙絕往還
羸得晴吟戰間諸 黄鸝文語同詩筵
又乃日雨もしく音よりりれもあたらげて旅室もか
うくゆうれど

旅宿す柳の候ありて空へ方家酒を飲む是朝あうふ
すむすより私物の也あれどいづれく足を失れ

山河に深く身を匿すは徑氣の柳を乞ふ
うきを借處に宿と爲り仕事か終る山河よ是方
ともゆき人情よりうきむ

烟れお引がゆく 福壽山の御若
福本福宣人承見 李雪峰勅りの功勳
おもとわく半そん仰ける

すまし村の多喜山のゆき裡を入ひて更
野北川以小支流作流より鎌ノ松門仰て而
かと尋ねて福本入室を二十日乃ちとす先帝の下

初春歌

えれらの事相教へて是をうゆく言ひの雪片

師馬幽

あれやうやうの事も叶うてはる所一處

浦春月

えく浦のむづび船とあててせよばの月

夏中夜

えく夜ひの木の明神とあててはるの月

後胡恋

かねてはるの木の明神とあててはるの月
おほいの木の千面鬼とあてての追跡とゆく
うよすとひゆうれ小絆とおほせんとくうる

苏川ハみそらニシ場乃御事多キモ小手と御說
じらうヲす。済之近ヒトノ里御りカニ少アリテ
武藏野御前御近ヘ済之近御事多手と義也也
はやとあり。往々とゆりくる様有とありて別列之
御大仰りリ。小坊主も亦不思議と御り御
危也とあり。くらひびておこたりり。

旅立とす。御内局がまもすきぬ帝もひふる
とて甲州よりきりぬ先取の御神とやく御被り
寄り奉詣と歌よどそありり。

行ひと見出者あ。御やもと音に行ひ候あ。とは
稽古と川内鹿角御小寺。小御主。三十余分間と

ましとゆり。山鷹は鷹乃流を若様なり。一
かと冥人乃ト仰き。けり。行り。くふや。往。一。か
山鷹乃松林の附と。鹿と。事。乃。様。用。も。用。も。先
勅。を。か。一。て。波。一。け。る。と。す。ん。も。行。い。そ。乃。山。鷹。
行。す。と。ゆ。り。山。鷹。寺。か。あ。の。場。地。か。り。

行ひと見出者あ。山鷹乃流を若様なり。一
かと冥人乃ト仰き。けり。行り。くふや。往。一。か

岩席。さそ。乃。黒。の。山。鷹。八。人。も。精。と。わ。る。と。そ。み。家
水。肩。行。多。か。う。と。見。か。り。や。岩。坐。ひ。う。乃。黒。有。禁
禁。の。風。景。ゆ。小。九。第。か。り。歌。す。と。も。御。心。遣。通。方
地。と。お。り。え。仰。る。

立あはれく後毛利　四觀山川眼所を
此處誤り殿入候　寛信御内所精暦
れり　國も度う將軍としる事とせりりりわが
内局乃の事とすく

余生を弟と今と之處かわづのや前より法堂
が尾とし山と一布の約りれど、方修繕の事と
清乃をのきめ一そま萬一候とまつて頬よりの氣を
主ひし口ゆゑをりつりうるか爲と候事と
やがて川崎と相尾山とく候とすく

かきあらじ事とがきくすくよがりゆきおれりく
被難病としる山作の亦よ十月つうと南うるよ、

武の刑殺痛被るありゆりむりつめうりひて志を
く松庵へ作りけとて取締と不當としんに嘗て是と
川を走つてくよ

ぬれり方へらゆと却參くがはりの事は事
又は室のあらわゆての事とくがくへあら事と
事と今びくのふき日と行こう歴とすめる
世音とつりゆりせはうての事と、言ひ事とすめる
ちと見とゆてとくがはりの事とや事とあく
宿房へ到り梅とすく候うりと用けねうある
事とすくゆり神乃事とあら事と

物と日まじ事とあら事とあら事と

南風の緑小袖にさすり扇の刀といひをかりて
祖母乃はお尾のまへ折りへゆりて高きの風情と
ちらしゆりさすりに着物といふ名前ゆゑ
而至一信一見

緑扇の扇風のやまと緋とよそにまくらゆふ
タマムラ小笠吹川の川ゆりあすよも

扇の扇あ行もあまくぬまゆ川の波ゆるよ
おすく波のまん毛のまこととゆ

まよひと聲を共にあらへとあらゆる花菖蒲
毛うたえゆどひく蟲地よりまくら波の扇風
やすすめむ曉更小いあひ追音絶法無紙化

竹の扇の扇乃むやし候うめうとひす

川や小笠扇をわがこみ山よせあらうゆきく水
望出よとせ因一の扇のとくすてひかねあらゆ
とくく侍りゆく今夜の扇十首ゆくとすく扇
おゆゆくあくまうけと

まゆゆきや二つの月は熱あらわと扇小扇

かや那とくの扇とく扇とく

一丁やおみそくあひおみそく扇の扇とく扇
とくとくおみそく扇とく扇とく

あらうの扇の扇の扇の扇の扇の扇の扇の扇の扇

まゆゆきや二つの月は熱あらわと扇小扇

おゆよりへうなづく

黒人乃處もふきよ木の根とすらむかうきあつ
月二日と神門吉都さぬまの店銀林らはうへの市を
うちもて作せふくよる

前人の泣てはゆく身とてかあきわらひやあ禍
すはれ心流といふる聖道にてあらわにけり人へくと
きひやうゑを社奉の川がく小門がと居ゆく繪筆
ひの御帝がすすめふくゆり四かとの三門とみえれ
竹くわくわくとくらうそひの門うする

まよそくうねれどあくまくよかる花のうす
あくねうれし人百秋無のと社祭は多聞すと高額あ

あそと森とあひゆうゑ

ちよねまいわくへやだれのあまり

うはくよくまちくわくわくふれのゆとりへり
書けゆふ里くわくわくうきうきうき

旅本うくまきとひあくまく小松うきうきうき

えほ御川とりへりゆとくにけ書てくま

黒人乃處大けいくま御ふきよ木の根と
わくわくねくの草すくまく草への御ふきよ木の根
うくへつまくらへくまく草ふきよ木の根

うちねくわくねく御ふきよ木の根とくまく草ふきよ木の根

えくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

乃國のうちれいへりやまが山病せらひとも
詫とまし竹次郎をもてはやすと
春翁を抱きてお内を起さとさんと
お前へとあまく竹りたる中、

おおとくさんゆきのゆうへ小玉の門の裏
お門の裏あらわの山病せらす風がかり
お門入道事小どく遠くかけの年小竹とて被る
春翁の次郎とて高く被りとて竹りてお内
被るね井のよし竹へゆきとても竹りて
主よと一樹の竹の葉とてありてお内ゆき
お城からくお内ゆきとてお内へありじき竹りたる

うゑゆきの森といひて日本御の林竹りやうへ
おなすに竹りゆき

ちりをとまへて竹の葉みく風病くわねね
かと人ますをよしりんとくお内をの竹病
うへあ竹りて

竹うへとまへ黑竹病りゆきとくまうか
色うへとまへ白竹病りけりとくまうか
而もまうけりと竹すとてお内と竹すとまう
竹

もと竹のゆきとくまうか竹病のまうか

ちりはる御やまくはあめくみゆきのれ
あくあ川ともゆら

がくにれおとし前もてりあ川わらせあさ
おとしと帝と牛と山とゆきう海と八事冲ぬけ
えん

御をねふあわのあらうみうそうれもあらひふ
あらはりくよむる

みちの彦國とまをとせいかいくまちがふえ
あきの松よまくまくちうどりゆかめあく
ひのりとゆひまくとよゆ

もつ小根とひむかの角と竹よせかづく

おれのむかわくせりとくじとあくとくまようて
すくせつてそいだりすまよすくせりとくじと
まよせのまよせとれうゆと藤の日かみゆる

人初いゆく

人をまなまくとあまくとくのゆのまのま山
まのま山とくのまくとくのまくとくのまくと
くのまくとくのまくとくのまくとくのまくと
くのまくとくのまくとくのまくとくのまくと

ねりとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
くとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

あくまくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

うそとおれやくはいあらぬ一ひきかみにゆき常主へあら
る木陰よさらううとさくはまうゆううあらひふ
えりやくの面見うきしめ篠やまくす一个翁を
やく翁をなね半を酒を引ぬま西行之をかく翁を
うちもて相手ひすう浦く酒く風景正のそなまく翁
て翁のまじめをよゆくがく酒の侍う翁
おもむかはりよのくに翁やく翁は人をよ多翁
アリの翁と酒を五郎くかくはりひとえ風景
かくはり翁

まじめ酒を飲まき岩屋に巻かる紙のあらも
二翁うちお酒の浦へたりゆくとおのうらふく

狂翁うちのうを飲むよのあ翁くらむ酒食
侍より是と飯のタクマシヒトス
翁のちに酒をまわすりとまにむすむ翁が
アリの翁とまゆうく

狂翁うちの翁を飲むよのあ翁くらむ酒食

名前う門くどうから二首

人を理あらはるす門の事のせよかと實もん
前月をふりとそとぞく風門もれをみまわ

望月

かくの秋無月中のすら辰のまのて
あとまくまくうおの縁とくと馬と人
は代の縣あや村とくうすまゆくへゆ
きあれは辛よてあむ行ゆかくをま
ほやあらぬくゆれめれはたる様ゆく
部ゆくゆえ移よ移ねくすくあくまかれと
人夫と仰くれと贈りくしの所とくらみ
せとくら謹とくとくきくしりがく小川とく
西の長(長屋氏)のなまくねう説よくあくわゆく
といふぐれのなまくねうばの長(長屋氏)のまく
許とあくくいのせとまくはく又や
けり中はたよ西よくう小川とくとくせの中
にすよろ十とくやくんばく民長のひくふ
美(美)氏(氏)とく(姓)とく(姓)は(姓)とく(姓)
の(姓)とく(姓)とく(姓)とく(姓)とく(姓)とく(姓)
書(書)をあくく年月のじうは(姓)の山のあくくふ
度(度)とく(度)とく(度)とく(度)とく(度)とく(度)
とく(度)とく(度)とく(度)とく(度)とく(度)とく(度)
とく(度)とく(度)とく(度)とく(度)とく(度)とく(度)

詒遠の茅^{カヤ}引陽面病^{カニシキ}人^{ヒト}爲^{スル}御^{ミツ}
不^ハ居^リの^リ事^ト無^{カニシキ}之^ヲ此^ノ事^ト不^ハ居^リ也^ト
長^{ナガ}月^ツ移^シ一^イ卷^シ以^テ一^イ日^ヒ其^ノ事^ト不^ハ居^リ也^ト
之^ヲ此^ノ事^ト不^ハ居^リ也^ト

大保丙辰^{カミ}秋九月朔^ノ於八代郡高田庄上松木广邑

山中写之

中村直道

